隣の家

一未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣の家

【Ｎコード】
Ｎ０４３１Ｕ

【作者名】
一未

【あらすじ】
一話単位の短編集です。
いつも挨拶を交わす隣の家庭は、もしかしたら、こんな感じかもしれない。
知らない家庭の中をほんの少し、垣間見てみませんか？

キミの部屋にガーベラを（前書き）

一話単位で書いていきます。
お好きな物語から、移動時間にでもサラリと読んでいただけたら幸せです。

キミの部屋にガーベラを

「なりたいもの？そんなもん、ねぇよ」
龍一は、パソコンの液晶を眺めたまま答えた。

「将来どうしたいの？なりたいものはないの？」
と訊ねた答え。

パソコンの液晶には、私にはてんで魅力と思われない可愛い過ぎる女の子のアニメが流れている。
部屋をグルリと見る。
相変わらず、わけのわからないポスター。
散乱したパソコン周辺のコード。
飲みかけの缶ジュース。
食べかけのスナック菓子。

「なるほどね。確かに、なりたいものって探すの難しいかもね」
と言うべきか。
「とにかく、何かを始めなくちゃ。いい加減、パソコンの前からはなれなさいよ」
と言うべきか。

どちらにしても、私の言葉は空回りのような気がする。

龍一、１９歳。
高校を卒業してから、こんな生活。いわゆる、ニートってこと。
引きこもりと該当するのかは判断しかねる。

「そう」
それしか言えず。

窓の外に目をやる。
梅雨入りした今日、朝から雨が降っている。
じめじめとした季節は、心にまで雨が降りそうで嫌な感じ。

せめて、明るく。そうね、せめて、この部屋、綺麗にしたい。
私の考えは、そこ止まりにする。それ以上、考えたところで無駄だと感じているから。

「でかけてくる」
龍一の背中に声をかけると
「あぁ」
小さな声が返ってきた。

雨の中、出かけるのは趣味じゃないけど。なんだか家にいるのも憂鬱だ。
パステルカラーのレインブーツを履いて、歩き出す。

隣の家の庭に紫陽花。

花言葉は移り気。

未来予想なんてしても意味はない。誰にもわからないことだから。

見事に咲いた紫陽花は、雨の中、笑っているみたい。

嘆く私を。迷う私を。

・・・・・・笑っているみたい。

・・・・・・笑い返してやろう。

ポツポツと傘から垂れる雨の滴を眺めながら、気分転換に利用するカフェへ行こうと思った。

隣の花屋。

足を止めたのは、初めてのことだった。

さっきの紫陽花が頭の中にあったせいかもしれない。

綺麗な花を眺めていると心は静かに穏やかに。未来とか考えるよりも現在(いま)この時、何かを感じられる自分がいることが一番だと思えてきた。

花の名前が書いてある値札。そこには、花言葉が書かれている。

「希望、常に前進」

赤、ピンク、黄色・
どれも可愛くて、どれも凛として。

「これ下さい」
思わず買ったのはガーベラ。

カフェに行くのをやめ、ガーベラを抱えて帰宅する。
花瓶に無造作に刺したガーベラを龍一の部屋に置きにいく。
ドアを開けると、龍一がこちらを見た。

私が手にしてるガーベラに視線をうつすと
「どうしたの？それ」
「なんとなく、買っちゃった」

机の横にあるカラーボックス、一番上。そこに花瓶を置くと、部屋はみごとに変化したようだった。

「ふぅーん」

パソコンから目をはなし、キーボードから手をはなし、ガーベラを見つめた龍一の顔も変化したように感じた。

「いろんなこと、体験してみると楽しいかもよ」

私の言葉に
「そうかも」
龍一は、まだガーベラを見つめたまま。
そして、私に向かって笑った。

キミの部屋にガーベラを（後書き）

次話、近々更新予定。

母の家出

「お姉ちゃん！」

激しくドアを開ける音とその声に目を覚ました。

「ん？もう時間？」

枕元の目覚まし時計がわりの携帯を手にする。液晶にＡＭ６：１２の文字。

確かに、そろそろ起きる時間だ。

アラームは６時半の設定。

「もう少し眠れたのに……」

しぶしぶ、ベッドに腰掛け足をフローリングへペタリとすると、ひんやりした感触が気持ちよかった。

と、ここまでの心地よさは、再び激しい「お姉ちゃん！」の声でかき消された。

妹の瑞穂（みずほ）がツカツカと私の前に立つと、一枚の紙切れを差し出した。

「なに？」

手にした紙は、大学ノートの一ページ。

しっかりカッターで切り取られ、一枚になっている。

『もう、この家には戻りません。
今度は、本気よ。
翔子、瑞穂。
家のことお願いします。』

この後ろには、ゴミの日やゴミの出し方から、調味料の置き場所。
さらに、時間割のごとく、曜日ごとに掃除場所まで書いてあった。

「また、家出？
どうせ、すぐに戻ってくるわよ」
「そうかな……」

と言いながら、大きなあくびをした瑞穂は、しっかり私服。
それも昨日のままだから、朝帰りだ。

どうせ、いつもの彼氏と一緒だったのだろう。

「そうよ。
お父さんは？」

ペタペタとフローリングの床の上を歩きながら、リビングへと歩きだした私に

「いないよ。
ね～今回は本気じゃないかな？」

後ろについてきた瑞穂が心配そうな声をだした。

「……」

答える言葉探すというより、半分、頭が回転していない。
洗面所で歯磨きをして冷たい水で顔を洗う。

コーヒー飲んで……とコーヒーメーカーを見たら、からっぽ。

そっか、お母さん家出したんだ。

私は、やっとここで家出の事実を受け止め始めた。

インスタントコーヒーを戸棚から出しながら

「戻ってくるよ」

瑞穂に明るく答える。

「ん……なら、いいけど。
一応、お父さんにはメールしてみたけど」

「何か言ってた？お父さん」

「ううん」

瑞穂はうつむいた顔を左右に振った。

……　母の家出は、これで何度目だろう。
原因はいつも父。
社長と名のつく父のおかげで私達は、それなりに優雅な暮らしができている。
けれど、お金があるということは、人を自由にしすぎてしまうのだろうか。
父だけだろうか。
わからない。

浮気と呼ぶには、少しばかり違うような、父の女癖。
つい最近、愛人に子供ができた。

私と瑞穂に弟ができたのだ。
その事実を知らされたのは、つい最近のことで、それも父からではなく母の口から知らされた。

「惣(そう)と言うそうよ。翔子と瑞穂の弟の名前」

ぼそっとつぶやくように言ったあと、母は何もなかったようにテレビのスイッチを入れ、バラエティー番組にチャンネルをかえた。

「あはは」

と、声をあげて笑い、それについては以後、何も言わなかった。

母は、父に女ができるたび、家出をした。
私が小さい頃は、私と瑞穂を引き連れて、ホテル住まいをしたり、実家にかえったりしたものだが、瑞穂が中学生になってからは、一人で家出をするようになった。

「あなた達は、学校があるでしょう。お勉強、ちゃんとしてね」

それが家出する時の口癖だった。

私が働きだし、瑞穂が大学生になると、その口癖もなくなり、小さなメモ用紙に「家出します」とだけ書いて出ていくのが常だった。

……　けれど。
瑞穂が不安がるように、今回の家出は違うような胸騒ぎが私にもあった。

母の携帯に電話をしてみたが、つながらない。
父の携帯にも電話をしてみる。

長い呼び出し音のあと、留守番電話に切り替わった。

伝言をする気にもなれず、そのまま切ってから、時間に目をやる。

「やだ！
遅刻しちゃう！」
慌ててお化粧を始めると、いつもとかわらない朝のよう。

「瑞穂は？学校？」

「今日は行かない」

「あっそ。
留年だけはしないようにね」

「お母さんと同じこと言わないでよ。
アタシ、今日はお母さん待ってる。
ここでずっと待ってる」

母が一人で家出したときと同じように、リビングのソファにゴロンとした瑞穂は、私が着替えて家を出る時には、静かな寝息をたてていた。

「行ってきます」

いつもの朝は、この声に

「行ってらっしゃい」

母の声が聞こえる。

けれど、今朝は何の声も聞こえなかった。

スーツを着てパンプスを履く。

慌てていたけど、メイクはしっかりした。じゃないと、私が私じゃなくなる気がしてならないから。

気持ちを切り替えるのに、メイクは必須。

『できる女』と呼ばれる私は、外の顔になる。

コネではなく、一流企業にＯＬとして入社して１０年。

必死で働いてきた。

男に負けないくらい。

駅のホームに立ち、ポケットに入れた母のメモを広げてみる。

嫌な予感。

的中しなければいいけど。

ふと、数行目で視線を止めた。

『毎週、木曜日。
燃えるゴミ』

今日って木曜日じゃない。
ゴミ出してない。

瑞穂の携帯を鳴らしてみたけど、出ない。
ぐっすり寝ているのだろう。

温風が私の髪を乱すようにして、黄色い電車が止まった。

いつもの朝は、もう二度とないのかもしれない。

母は今どこにいるのだろう？

……　あの男のところだろうか？

これだけは、瑞穂にも父にも言えない私だけの胸騒ぎ。

『ゴミ出しして』

おそらく、メールを見る頃にはゴミ収集車が来ていて間に合わないと思いつつ、瑞穂に一応、メールをする。

『家は私と瑞穂だけになりました』

一か月会っていない父にメールをし

『今、幸せですか？』

母にメールをした。

☆完☆

総理大臣はかわっても

「よっ！」
ノックもなしに俺の部屋に入ってきた俊介（しゅんすけ）は、小学校からの付き合いだ。
成人式を過ぎた俺たちは、長いといえば長い付き合いになるのだろうか。

「ほら、差し入れ」
ビニール袋は、近くの大型スーパーの物だ。コンビニなんて高くつくから、もっぱら俺も俊介もそこを利用する。

差し入れと称されたビールは、俺が飲むわけじゃない。ついでに柿の種もさきいかも、全部、俊介の胃袋に行くはずだ。

「ほら、少しは太れよ」と、机に向かう俺の前には、大人買いのうまい棒とブラックサンダー。ついでに、ゲーセンでとったというプーさんのぬいぐるみ。

「おつ」簡単な挨拶をして、スカイプのマイクとヘッドホンをはずす。挨拶したのは会ったことはないネトゲーの仲間。なんだかんだ言いながら、毎日、話をしているのは、ネトゲーの輩だという俺の生活。

「サンキュ」うまい棒を食べ始め、さっきまで液晶に向けていた視

線を俊介に向けると、主の俺よりでかい態度で、カーペットの上に寝転がっていた。買ったばかりのスマホを片手に、ビールを一気に飲み、さきいかを食べている。

「明日、休みだっけ？」
「何度も聞くなよ。明日は、土曜。俺は休みだってぇの」
「そっか」
何度も聞いた記憶はないが、高校を卒業してから三つ目の会社に就職した俊介に、少なくとも三度は聞いただろう。「休みは、いつ？」と。

＊＊

卒業してすぐに就職した会社は、入社間もなく倒産。たった数か月で失業者になった俊介。
二つ目の会社をやっと見つけたと思ったら、なんともドキュンの連中ばかりで、酒の付き合いも大変な上に、なにやら事件に関わりそうなことになり、退社。
数か月プラプラしてたけど、半年前に今の会社に就職できた。
現実、高卒で社員の仕事を探すのは、難しい。

だから……。
俺は、未だにこんな生活ってわけだ。こんな生活って、言っておくがニートではない。キチンと働いてはいる。社員でもなく、不定期だが。

＊＊

「そろそろ、浩二が来る頃だな」
時計の針を見る必要はなく、手元にあったスマホで時間を確認する。
ＰＭ１０：１８。

「もう、バイト終わったでしょ」
「あいつも大変だよなぁ。今ってさモンペ連中、学校だけじゃないってよ。塾もすげーなんだかんだ言われるらしい」
「仕方ないね。時給いいし、我慢するしかないでしょ」
「まぁな。将来、教師目指してるんじゃ絶えなくちゃな」

噂をしていたら、俺と俊介のスマホに浩二からメールが来た。
『今から行く』

律儀なやつだ。二人にメールを送るなんて。俺と俊介は、勉強が嫌いだったが、浩二は違う。エリート中のエリートと言ったところだ。中学の頃から、もともとのモノが違うのか、ゲームしまくってるわりに成績優秀。私立進学校に進み、今は大学生という肩書と塾講師という肩書を持っている。
俺たちふたりには、この浩二が友達ってのがある意味自慢でもある。

「テレビでもみるか」
滅多につけないテレビのスイッチを俊介がＯＮにするとニュース番組が放送されていた。

「総理大臣がかわったんだな」
「らしいね」

「で？お前、明日仕事だっけ？」

さっき、俺が訊いたことを今度は俊介が訊いてきた。
「あぁ、明日はキツイ会社だ。このくそ暑いのにクーラーなしだ」
「まぁ、倒れないようにしろよ。
総理大臣がかわっても、俺たちは何もかわらないな」
「まったくだ。明日は汗だくの俺。なにもかわりはしない」

「つまんねぇな」
俊介は、お堅いニュース番組から、バラエティ番組へとチャンネルを切り替える。
テレビから流れる笑いに、ふたりして笑っていたら、スーツ姿の浩二がやってきた。

「総理大臣かわったってさ」
俊介が言うと
「選挙に行かない俺たちには、あんま、関係ないよな」
浩二は、ネクタイをはずし、背広をぬぐと、カーペットの上に寝転がった。

［完］

贅沢な朝

深夜２時。
開いていた参考書をパタリと閉じる。
深い夜は、小さな物音さえも大きく感じる。
私はそれが嫌い。……　だから。
いつもテレビを点けているか、音楽を聴いているか、どちらか。

そろそろ寝なくちゃいけない。
明日だって早起きだ。
でも、ここまで、どうしても勉強しておきたかった。

自分で自分を追い詰める。
ノルマを決めて自分に厳しくしないと、すぐに抜かされる。
順位なんて気にしないで生きれたら楽なのにな。

なのに、私はそれが気になってしまう。
何のために勉強するんだろうって思う時もあるけど、それをしないでいたら、どうしていいかわからないかもしれない。

大学に行くため？
将来のため？

何もかも投げ捨てて、お化粧しておしゃれして彼氏がいて。そんな生活も悪くないんだろう。でも、できない。

布団にもぐりこみ、目を閉じる。
メールチェック忘れたけど、どうでもよかった。

一、二、三……。
深い眠りはすぐに訪れた。

＊＊

携帯のアラームが鳴る。
ひとりで起きることには、慣れている。

いつもそうだから。

キッチンに行き、ホットミルクとバターロール一個。
バターロールは、スーパーの割引品がほとんど。５個で１００円に２０％引きにシール。たまに、５０％引きもあると、かなりなお得品になる。賞味期限なんて冷凍しちゃえば気にならない。
それが私の朝食。
３６５日かわらない。
これと決めておけば、楽なのだ。

トーストーにしようか、ご飯にしようか。
ご飯なら、ふりかけは何がいいかとか。
トーストなら、何のジャムがいいかとか、それともバターがいいかとか。
卵は必要かとか。
迷うことは無駄だと思うから。

そっと、キッチンの隣の部屋の襖が開いていた。見るとはなしに、見てしまう。

……　母が寝ている。
そして、隣に……　男が寝ている。

父じゃない。新しい男。週に一、二度の訪問者だ。

別にかまわない。母は独身だし、父はとっくに死んでる。
別にいい。恋愛は自由だし。

私には関係ない。

けれど、この家でセックスだけはしてほしくない。そう思う。
朝くらいおきて「いってらっしゃい」を言って欲しいなんて思わない。
そんな言葉、いらない。

それよりも私が欲しいのは、大学へ行くためのお金。
参考書を買うお金。
ゼミに行くお金。

お金、お金、お金。

＊＊

足音をさせずに歩くことを覚えたのは、父が死んで間もなく。母が知らない男を連れてきた日からだ。

「緑、この人ね、パート先の主任さん」

そう紹介した主任さんは、頭の禿げたおやじ。

お父さんの方が断然、かっこ良かった。
なんて言えず、曖昧に私は挨拶をしたように思う。

その日から、男が入れ替わり、この新顔は私の知る限りじゃ五人目だ。
不倫なのか、そうでないのか、興味はない。どの男もたいしたやつじゃない。
それなのに、母は男にくっついて生きている。

醜い。とまでは言わない。
けど、ああはなりたくない。

……　だから。
勉強をしてるのかもしれない。

男を頼らずに生きる力が欲しいから。

＊＊

襖の隙間から垣間見た母の寝顔。
なかかの美人と評判の顔は、目を閉じていると、疲れた老婆のよう。

父がいなくなってから、母はスーパーに勤め、禿げおやじのせいかどうか知らないが、そいつと別れた途端にスーパーを辞めた。
そのあと、小さなお店を開いた。いわゆる水商売だ。

必然的に、夜は私ひとりになった。
始めたばかりの頃は、朝は私を起こしてくれてたけど、段々にそれがなくなっていった。

気づいたら、いつもキッチンテーブルには、お店の残り物が申し訳なさそうに朝食としておいてあった。

朝から食べたくもないメニューが並んでいると、吐きそうになった。

あの日は、確か参観日だった。
朝は起きない母だけど、参観日には必ず来てくれていた。美人の母は、生徒と父兄の注目で、それが恥ずかしいような、嬉しいような。
その時だけは、自慢の母だった。

帰り道。
シンプルなワンピースを着た母と近所のスーパーに寄った。

パン売り場で足を止める。

「アタシ、朝はこれでいい」

２０％引きのシールが貼られたバターロールの袋を指さして私が言うと、母は

「じゃ、これ買おう。いつも、残り物でごめんね。朝、起こさなくてごめんね」

私にごめんねを繰り返しながら、バターロールの袋をひとつ手にしてレジに並んだ。
その姿は、確かに人からみたら綺麗な女かもしれない。
けれど、さっきまで自慢の母が、バターロールの値引きを喜ぶちっぽけな女に見えた。

父が死んだことで私と母の生活がこんな風に変化してしまったと、

嘆きたい気分だった。

……　その日から私の朝食は、バターロールになった。

＊＊

静かに玄関の鍵をかけ、学校へと向かう。
駅から電車に乗る。駅までは歩く。
自転車でもいいけど、歩くことは寝ぼけた頭を冴えさせる効果があるような気がして、片道１５分。毎朝歩く。

駅前には、ブルーの看板「須川ベーカリー」
そこから、毎朝、かわらない焼き立てのパンの香り。
スーパーの安売りのバターロールが胃袋から消えて、焼き立てパンをほおばりたくなった。

時々、そう。
時々。
私はここでパンを買う。

それはお昼用のパンだったり、おやつだったり、夕飯用だったり。
基本、お財布と相談する。なぜなら、スーパーのパンの方がだんぜん安いから。
ここのパンはご褒美みたいなものだ。

たくさんのパンの中、私が一番好きなのは、やっぱりバターロールだ。
特別な朝だけ、母はここのバターロールを買ってくれる。

小中と、いつも。
遠足とか運動会とか、それから、各学期のスタートと終わり。

特別な朝は、年に数回。
それが私の贅沢な朝だった。
＊＊
冬の真っただ中。
どうして、こんな季節に受験をするのだろうかと思ったりする。
「明日のお天気」が今まで生きてきた中で一番気になった。
正確に言えば、一番じゃなく二番かもしれない。
小学校の頃、遠足の前夜と同じくらい。
「明日はおおむね晴れでしょう。受験生の皆さんは明日センター試験ですね」
なんて、余計な事をいうアナウンサーの声が少しばかりうるさく感じてテレビを消した。
……　やれるだけのことをやったつもり。
ゼミもなんとか行かせてもらえた。
お金の出所は、母の経営するお店からなのか、男からなのか。
訊く気にもならず、ただ、振込用紙だけを母に渡していた。
受験料もしかり。
それでも、家計を考えて私は国立を志願した。
いつもより早めに寝るため、夜中に必要のない物音で目覚めないため。

あたためたホットミルクをゆっくりと飲む。

ひとりの夜には慣れている。時折、鳴る携帯は、ひとりをかき消すメールだったりする。

友達いないわけじゃないし。

既に推薦で大学が決まった友達から、メールが来たりもしていて、それはそれで嬉しいものだ。

メールに返信をしていると、何かに追われているように着メロが鳴った。実際、追われているわけじゃなく、それは、私の心が落ち着いていないせい。

♪♪♪

「もしもし」という私の声より先「明日は晴れだってね。良かったね」母の声が聞こえた。明るい元気な声は、お店にいるせいだろうか。

いや、母はもともと。

そう、もともと、明るく元気。

美しい母は、父がいるころ「美人のママ」「元気で明るいママ」で有名で、私はそれが自慢だった。

父の葬儀から、変わった環境の中。

それでも……母は、時折見せる悲しい顔を隠して、いつも明るく元気だったのだ。

私が気づかなかっただけのこと……。

「そうみたいだよ。今日はもう寝るから」

簡単に電話を切ろうとする私に
「緑ならやれるよ。がんばれ！」
と言ってから、何を考えているのかカラオケで歌い始めた。

♪♪　桜サケ。君の……　♪♪

「嵐じゃん」

「耳痛いから切るよ」
途中で電話を切ったのは、本当に耳が痛かったから。
電話を切ると痛い耳を軽くさする。不思議とさっきまでのざわめきが消え、穏やかな気持ちになっていた。
布団にもぐりこみ、一、二、三。
すぐに眠りについたのは、きっとホットミルクのせいだろう。
母の歌声は、まだ。
耳に残っていたけれど……。

＊＊
アラームが鳴る前に目が覚めた。さすがに緊張しているのかもしれない。
淡々とかわらない朝のように、着替えをし、足音をさせないようにキッチンへ行く。

寒さで冷えているはずのキッチンが暖かい。
暖房がついていて、キッチンテーブルに伏して母が寝ていた。
テーブルの上には<合格祈願>のお守りと、鋭く削られた鉛筆が二本。
新しい消しゴム。

それから……
須川ベーカリーのバターロール。

今日はかなり特別らしく、須川ベーカリー特製のいちごジャムも置いてある。

母の肩にそっとショールをかけ、起こさないように朝食をとる。
甘酸っぱいいちごジャムが口の中で広がり、あったかいホットミルクとよく合う。

……　やれそうな気がする。大丈夫。
自分に気合を入れて、寝息をたてている母の手にそっと手をあてた。
禿げたマニキュアが少しばかり動き、それでも母は寝息をたてている。

足音を忍ばせて、そっと、家を出る。

ポケットにお守り。

筆箱に鉛筆、消しゴム。

胃袋にバターロール。

私の贅沢な朝。

天気予報は当たり。

……　晴れた一日がスタートした。

＜完＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0431u/

隣の家

2011年11月6日14時08分発行